

## “おつかい”場面における子どもの心、親の心

教育委員 橋本 和明

“おつかい”と聞くと、みなさんはいつ頃、どんな場面で、誰から、どのような頼まれごとをされたでしょうか。これまで誰もが、どこかで、何らかのおつかいを頼まれているかと思います。その時のことを少し思い浮かべてください。

テレビ番組においても、『はじめてのおつかい』が長者人気番組にもなっています。そこにはまだまだ幼く甘えん坊な子どもが親からおつかいを頼まれ、うれしい反面、少し不安が混じり合う複雑な気持ちでおつかいに出て行くシーンが映し出されます。頼まれごとを忘れないように何度も口に出して確認する子、最初はルンルン気分であったのですが、だんだん不安と寂しさから泣き出す子、年下のきょうだいの手前もあって、内心は不安でいっぱいながらもカラ元気を通す子などさまざまです。

一方、わが子をおつかいに出す親の方も、途中で危ない目に遭わないだろうか心配したり、途中で投げ出して泣いて帰ってこないだろうか不安でドキドキです。そして、おつかいをしてきた子どもを迎え入れるときには、親もうれしさや安堵感から涙してしまうことも少なくありません。

そこに共通して見られるのは、親から離れていく子どもの自立であり成長の姿かもしれません。逆に、親の方はというと、子離れの苦悩を乗り越え、これまで以上に子どもを見守る姿勢がしっかり感じ取れたりします。今までくっついてきた親子が少し距離を保ち、親離れ、子離れを経て、互いに成長していくありようには、見ている方も感動させられます。おつかいにはこのように、まだ一人前ではないけれども、その一歩を踏み出すテーマがそこにはあるのです。

私自身も幼稚園の頃、夕食の料理に必要な調味料が切れていたのも、母親に頼まれ、それをお店に一人で買いに行ったことがあります。手にお金を握りしめ、いつも行くお店におつかいに行きました。顔見知りの店員さんにそのお金を代金として渡しますと、「僕、一人で来たの？偉いね。」と声をかけられたことを今も覚えています。そして、おつかいを無事終わると、母親がお駄賃にとそのおつりをお小遣いにくれたこともいい思い出として残っています。

このように、おつかいをめぐる子どもと親の心の交流があるわけです。そして、もう一つここで見逃してはならないのは、それを見守る周囲の大人の存在です。『はじめてのおつかい』の番組でも、どれだけ多くのスタッフがおつかいに出かける子どもを支えたり、家族はもとより地域の人や出会った大人がそれを見守ったりしていることでしょう。先のおつかいの場合も、店員さんが私の顔を覚えてくれており、声をかけてくれたことが心細い私をどれほど勇気付けてくれたことでしょうか。子どもが成長し自立をしていく背景には、親だけではなく、地域の人々や多くの大人の支えがあります。逆に言えば、これがないと、スムーズな親離れ、子離れができません。その意味でも、私たちは自分のおつかいのことをもう一度思い出し、その時にどれほど多くの人に見守られていたかを考えてみてはどうでしょうか。